

西川長夫教授略歴・主要著作目録

略 歴

1934年 5月 1日	平安北道江界郡江界邑石古洞に生れる。
1954年 3月	岐阜県立長良高等学校卒業
1954年 4月	京都大学文学部入学（2年間病気休学）
1960年 3月	京都大学文学部フランス語フランス文学科卒業
1960年 4月	京都大学大学院文学研究科入学
1965年 3月	京都大学文学研究科博士課程単位取得退学
1965年 4月～1966年 9月	京都大学文学部フランス語フランス文学科助手
1966年 10月	立命館大学文学部専任講師
1967年 10月～1969年 9月	パリ大学文学部（ソルボンヌ）博士課程に留学
1969年 10月	立命館大学文学部助教授
1974年 4月	立命館大学文学部教授
1975年 10月～1977年 9月	パリ第三大学東洋語東洋文化研究所講師
1983年 7月～1985年 4月	モントリオール大学客員教授
1988年 4月～2000年 3月	立命館大学国際関係学部教授
1990年 7月～1993年 7月	学校法人立命館評議員
1991年 3月	文学博士（立命館大学）
1993年 4月～1995年 3月	国際言語文化研究所所長
1996年 7月～1999年 7月	学校法人立命館評議員
1997年 4月～2000年 3月	国際言語文化研究所所長

学 会

日本フランス語フランス文学会会員 関西フランス史研究会会員 スタンダード・クラブ会員
（仏） 日仏歴史学会会員 歴史学研究会会員

業 績 一 覧

著 作

単著

- 『スタンダールの遺書』白水社 1979年2月
『ミラノの人スタンダール』小学館 1981年3月
『フランスの近代とボナパルティズム』岩波書店 1984年1月
“Le roman japonais depuis 1945”, Presses Universitaires de France, 1988・5
『日本の戦後小説—廃墟の光』岩波書店 1988年8月
『国境の越え方—比較文化論序説』筑摩書房 1992年1月
『地球時代の民族＝文化理論—脱「国民文化」のために』新曜社 1995年10月
『国民国家論の射程—あるいは 国民 という怪物について』柏書房 1998年4月
『フランスの解体?—もうひとつの国民国家論』人文書院 1999年10月

共著

- 『ルソー著作と思想』有斐閣 1979年2月
吉澤昇, 宮島喬, 原好男, 海老澤敏との共著
第3章「新エロイズ」(63 - 107)
『現代フランス生活情景』1983年8月 有斐閣
天羽均, 宮島喬, 木下賢一, 大空博, 稲本洋之助との共著
序章「フランス的個人主義について」第一章「若者たち」第四章「現代の家族」
(1 - 41, 102 - 136)
『「悪の花」註釈』(上・下) 1986年3月 多田道太郎編 京都大学人文科学研究所
(後に平凡社から上・中・下 全3巻として1988年3月出版)
《「燈台」「病気のミューズ」「身を売るミューズ」「巨大な女」「まぼろし」「タベの階調」
「旅への誘い」(以上上巻)「植民地生まれの夫人に」「パイプ」「ひびわれた鏡」
「強迫観念」「風景」「盲人たち」「虚俗を愛す」「朝の薄明」(以上中巻)「殉教の女」
「キューピットとどくろ」(以下下巻)を担当》

共編著

- 『戦後価値の再検討』有斐閣 1986年9月(中原章雄との共編 講座『現代日本社会の構造変化』6巻)
序章「戦後価値」再検討のために」(1 - 30)

- 第2章「三島由紀夫における日本回帰」(271 - 296)
- 第9章「江藤淳における「戦後」と「日本回帰」—無条件降伏論争をめぐって」(211 - 234)
- 『ロマン主義の比較研究』有斐閣 1989年(松宮秀治, 末川清との共編)
- 第一章「ロマン主義を考える三つの視点」(2 - 41)
- 『比較文化キーワード』(サイマル出版 1994年)(竹内実との共編)
- 「新しい文化モデルの模索 - プロローグ」(7 - 18)
- 「人種」(190 - 192)「民族」(195 - 199)「文明と文化」(128 - 143)
- 『米欧回覧実記を読む—1870年代の世界と日本』(法律文化社 1995年)(松宮秀治との共編)
- はじめに(1 - 12)
- 第14章「統合されたヨーロッパ—ヨーロッパ総論—」(339 - 369)
- 第15章「アジアと世界の再発見」(371 - 401)
- 『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』(新曜社 1995年3月)(松宮秀治との共編)
- 序章「日本型国民国家の形成—比較史的視点から—」(1 - 42)
- 『ヨーロッパ統合と文化・民族問題—ポスト国民国家時代の可能性を問う—』(人文書院 1995年9月)(宮島喬との共編)
- 序章「歴史過程としてのヨーロッパ」(11 - 39)
- 『多文化主義・多言語主義の現在 - カナダ, オーストラリア, そして日本』(人文書院 1997年10月)(渡辺公三, ガバン・マコーマックとの共編)
- 「多文化主義・多言語主義の現在」(1 - 23)
- 『アジアの多文化主義と国民国家』1998年9月(渡辺公三・山口幸二との共編)
- 序章「国民国家とアジアの現在」(11 - 21), 「アジアから世界の国民国家を考える」(230 - 251)
- 『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房 1999年(渡辺公三との共編)
- 序「帝国の形成と国民化」(3 - 48)

共編

- 『クラウン仏和辞典』三省堂 1978年2月(1983年第2版 1989年第3版 1994年第4版)
- 佐々木康之, 多田道太郎, 山田稔との共編(第3版より天羽均が参加)
- 現在第5版改定が進行中

論文

- 「スタンダールのボナパルチズム」(『学園評論』№1 1960年4月1日 学園評論社)
- 「スタンダールのナポレオン」(『フランチア』№4 1960年12月 京都大学仏文科教室)
- 「作品の発見—『アルマン』における性的不能の解釈について」(『視界』№2 1961年11月)

- 後に『『アルマンズ』論—性的不能の解釈』として『スタンダールの遺書』に所収)
- 「疑問文の諸形式」(『フランス語研究』№27 1961年)
- 「スタンダールの『イタリア絵画史』」(『フランシア』№5 1962年)
- 「深沢文学批判の批判」(『思想の科学』1962年11月)
- 「ラクロ試論」(『フランシア』№7 1963年)
- 「エルヴェシウスにおける《人間学》の構造」(『フランシア』№8 1964年)
- 「ヴィクトル・ユゴーの詩におけるボナパルチズム - 19世紀ナショナリズムと文学」(『フランシア』№9 1965年)
- 「《ヴァンセンヌ体験》の語るもの—ルソー研究ノート⁽¹⁾」(『立命館文学』263 1967年5月)
- 「『ヴァンセンヌ体験』再論—ルソー研究ノート⁽²⁾」(『立命館文学』268 1967年10月)
- 「日本におけるフランス—マチネ・ポエティック論」(桑原武夫編『文学理論の研究』岩波書店 1967年12月)
- 「『ナポレオン伝』の作者としてのスタンダール」(『スタンダール全集』11巻評伝集 人文書院 1970年)
- 「ルソーにおける革命概念と革命志向」(桑原武夫編『ルソー論集』岩波書店 1970年)
- 「サルトルからアルチュセールへ —マルクス主義とヒューマニズム—」(上下)(『思想』567・568 1971年8月)
- 「ボナパルティズム概念の再検討」(『思想』583 1973年1月『フランスの近代とボナパルティズム』に加筆再録)
- 「ボードレールとブルードン —形成期における「科学的」社会主義と「現代」文学—」(『思想』598 1974年4月)
- 「反国家主義の思想と論理—ブルードンとボナパルティズム」(河野健二編『ブルードン研究』岩波書店 1974年9月『フランスの近代とボナパルティズム』に所収)
- 「ボナパルティズムとデモクラシー —第二帝政研究の視点から—」(『思想』616 1975年10月『フランスの近代とボナパルティズム』に所収)
- 「思想の秋—ボードレールとフローベール」(『展望』1975年11月)
- 「ボナパルティズムの原理と形態」(河野健二『フランス・ブルジョア社会の成立』岩波書店 1977年11月『フランスの近代とボナパルティズム』に所収)
- 「五月は遠く—仏左翼連合政権への夢と現実」(『展望』1978年1月)
- 「スタンダールの晩年」(『展望』1978年3月『スタンダールの遺書』に所収)
- 「歴史研究の方法と文学」(『歴史学研究』457 1978年6月)
- 「旅の思想 - 森有正における<日本回帰>について」(『展望』1978年8月)
- 「歴史叙述と文学叙述—叙述の理論のために—」(『歴史学研究』463 1978年12月)

- 「フランス・ファシズムの一視点 —ドリュ・ラ・ロシエルの「ファシスト社会主義」について」(『思想』661 1979年7月)
- 「河上肇の自叙伝—河上肇における「没落」と「文学」—」(『思想』664 1979年10月)
- 「スタンダールの遺言」(『創造の世界』1979年11月)
- 「フランス的明晰とは何か」(饗庭孝男編『フランス6章』(26 - 74) 有斐閣 1980年6月 後『フランスの解体?』(以後『解体』と略称) 人文書院 1999年に所収)
- 「戦後日本の社会意識の変化—1960年代の日常生活・風俗・文学を中心に—」
(立命館大学人文科学研究所『第1回日ソ学術シンポジウム報告書』1980年6月)
- 「30年代精神 と文学」(河野健二編『ヨーロッパ1930年代』(24 - 79) 岩波書店 1980年8月)
- “Milano, l'épigraphe et le testament de Stendhal”(「スタンダールにおけるミラノ, 墓碑銘, 遺書」)
(*Stendhal e Milano* 1980 Milano 1980年ミラノでの国際スタンダール学界での報告をまとめたもの)
- 「遺書小説としての『アルマンズ』」(『立命館文学』424・425・426合併号 1980年10～12月『スタンダールの遺書』に所収)
- 「マルクス, エンゲルスの革命理論とボナパルティズム論 - 淡路憲治氏の所説に答えて」(『立命館文学』439・440・441合併号 1982年1～3月)
- “Les arbres et le romantisme chez Stendhal”(「スタンダールにおける樹木とロマン主義」)
(in “Stendhal et le Romantisme”, actes du V^e congrès international Stendhalien, 1982 Mayence. 第15回国際スタンダール学会での報告に加筆修正)
- 「ナポレオン伝説とロマン主義」(『立命館文学』446・447合併号 1982年8・9月)
- 「サルトルとアルチュセール」(『別冊経済セミナー』1983年2月)
- 「日本回帰とネオナショナリズム - 支配のイデオロギー」(立命館大学人文科学研究所 『第2回日ソ学術シンポジウム報告集』1983年3月)
- “Les pseudonymes et la création romanesque chez Stendhal”(「スタンダールにおける偽名とロマネスクの創造」)(actes du congrès Stendhalien en 1983)
- 「偽名とロマネスク」(作田啓一編『自律と懷疑—文芸社会学をめざして』筑摩書房1984年7月)
- 「1848年革命とフランスの農民」(阪上孝編『1848 - 国家装置と民衆』(287 - 325) ミネルヴァ書房 1985年9月)
- “Occidentalisation et Réaction japonaise” ~ (「日本的西欧化とその反応の」)
(『立命館文学』469 - 471 472 - 474 481 - 482 483 - 484 1984年7月 - 1985年10月)
- 「ナポレオン伝説—近代を考える視座」(『創造の世界』1986年2月)
- “Occidentalisation et «Retour au Japon»”(「西欧化と日本回帰」)(Corps Écrit No.17
“Représentation du Japon” Presses Universitaires de France 1986年3月)

- 「自伝と小説のあいだ—『アンリ・ブリュラーの生涯』におけるJ.=J.ルソーの問題をめぐって—」(桑原武夫・鈴木昭一郎編『スタンダール研究』白水社 1986年4月)
- 「織田作之助とスタンダール」(上下)(『立命館文学』490・492合併号 493・495合併号 1986年4 - 6月 7 - 9月)
- 「織田作之助とスタンダール,あるいは京都の織田作之助について」(『仏文研究』XV 1986年10月)
- “Le roman japonais de l'après-guerre” ~ (“日本の戦後小説”)(『外国文学研究』立命館大学外国語科連絡協議会) No.63,64,65,71,73,74,76 1984・10 ~ 1987・5 後に『日本の戦後小説』岩波書店 1988年)
- 「群集の発見」(多田道太郎編『ボードレー 詩の冥府』筑摩書房 1988年)
- 「ルソー —正義・革命・国家—」(寺崎峻輔他編『正義論の諸相』法律文化社 1989年5月)
- 「近代の群れ - シャルル・ボードレーと萩原朔太郎の群集」(『群れの描写』is別冊 1989年9月 ポーラ文化研究所)
- “Quelques Réflexions sur l'Historiographie Japonaise de la Révolution Française-L'Etat-Nation et son idéologie in L'image de la Révolution Française”, dirigée par M.Vovelle, t2 Pergamon Press 1989 『立命館国際研究』2巻3号 1989年12月にも再録 日本語版は『国民国家論の射程』(以後『射程』)に所収)
- 「フランス革命と国民統合」(『思想』1990年3月 後『射程』に所収)
- 「フランス革命の変容」(『立命館言語文化研究』1巻2号 特集フランス革命と現代 1990年3月(1~24))
- 「国民国家と軍隊の役割—ナポレオンを登場させた土壌」(『週刊朝日百科』(革命と反乱) 1990年10月)
- “La Révolution française et l'unité nationale-Une étude historique comparative (1)” (『立命館国際研究』3巻3号 1990年12月)
- 「フランス革命のとらえ方 - 革命200周年世界学界を手がかりに」(『世界史のしおり』帝国書院 47号 1990年)
- 「フランス革命の功罪—現代において革命を語ることの困難について」(『世界史のしおり』帝国書院 50号 1990年『解体』に所収)
- 「フランス革命とロマン主義」(宇佐美斉編『フランス・ロマン主義と現代』筑摩書房 1991年)
- 「近代日本における文化受容の諸問題—その基礎的考察—」(『立命館言語文化研究』2巻5・6合併号 立命館創始120年・学園創立90周年記念 1991年3月(23 - 56))
- 「フランス革命と国民統合—社会史と国家論の接点を求めて」(『JUSTITIA』3号 比較法制研究所 1991年4月)

- “Modernisation et Bonapartisme en France” (『立命館国際研究』4巻3号 1991年12月)
- “La Révolution française revécuté par Stendhal” (Présentée par Hisayasu Nakagawa, Presses Universitaires de Kyoto 1992)
- “Concept de Civilisation et Mirage Italien, Guizot et Stendhal” (Actes du Colloque 21-22 mars 1992: Stendhal, Paris et le Mirage italien, Bibliothèque historique de la ville de Paris, 1992)
- 「国民 (Nation)」再考」(『人文学報』京都大学人文科学研究所 70号 1992年3月)
- 「国民統合と文化変容 —第二期プロジェクト研究の歴史的理論的枠組みのために—」(『立命館言語文化研究』4巻1号 特集総合プロジェクト研究・異文化理解としての国際交流 1992年10月 (1 - 32))
- 「国家イデオロギーとしての文明と文化」(『思想』828 1993年5月)
- 「スタンダールとフランス革命・序—再び生きられた革命」(『立命館産業社会論集』29巻1号 1993年6月)
- 「『米欧回覧実記』と「脱亜入欧」—田中彰・高田誠二編著『米欧回覧実記』の学際的研究」(北海道大学図書刊行会 1993年)をめぐって」(『立命館言語文化研究』5巻1号 1993年10月)
- “Two Interpretations of Japanese Culture” (『立命館言語文化研究』5巻1号 1993年10月)
(*Multicultural Japan*, Edited by Donald Denoon, Mark Hudson, Gavan McCormack and Tessa Morris-Suzuki Cambridge University Press 1996 所収)
- 「「日本文化」にかんする二つの解釈」(『立命館国際研究』6巻3号 1993年12月)
- 「地球時代の民族 = 文化理論」(『立命館国際研究』6巻4号 1994年3月)
- 「新しい文化モデルの模索—世界システムと文明/文化の概念をめぐって—」(『立命館国際研究』7巻2号 1994年10月 (182 - 191))
- 「一八世紀フランス」(歴史学研究会編『国民国家を問う』青木書店 1994年)
- 「『国民国家』再考—国民国家を克服するとはどういうことなのか」(『新しい歴史学のために』№218 1995年5月 京都民科歴史部会)
- 「「国家理性」に関する一考察—ヴァイツゼッカー批判」(『江戸の思想』4号 1996年7月 ぺりかん社『射程』に所収)
- 「大岡昇平以前の大岡昇平」(大岡昇平全集第一巻解説 (819 - 835) 筑摩書房 1996年)
- 「ギゾーとスタンダール —文明概念をめぐって—」(『政策科学』別冊 立命館大学政策科学会 1996年3月)
- 「国民化と時間病」(『文学』1997春号 岩波書店 後に『射程』に所収)
- 「ナショナリズムとインターナショナリズム - フランス革命からナポレオンへ」(札幌日仏協会編『フランス革命の光と闇』勁草書房 1997年5月)

- 「国民文学の脱構築」(三浦信孝編『多言語主義とは何か』藤原書店1997年 後に『射程』に所収)
- 「現代における市民的教養と土曜講座」(『立命館土曜講座50年史 1946 - 1996』立命館大学人文科学研究所 1997年3月)
- “Au delà du Concept de Nation: l'Union européenne ou la Révolution refaite?” (『立命館国際研究』9巻4号, 1997年3月)
- 「漢字文化圏における文化交流」(『文化交流史研究』創刊号 1997年5月 後に『射程』に所収)
- 「ナショナリティ概念を越えて—欧州連合とポスト国民国家時代の可能性—」(『立命館産業社会論集』33巻1号 1997年6月(133 - 144)『解体』所収)
- 「アジアの中の日本・日本の中のアジア」(『立命館言語文化研究』連続講座「国民国家と多文化社会」第6シリーズ 国民国家とアジアの現在 9巻3号 1998年1月)
- 「国民国家と異文化交流」(『立命館経済学』46巻6号 1998年2月 後に『射程』に増補し所収)
- 「1968年5月—消えない言葉」(『立命館言語文化研究』特集 比較文化研究 9巻4号 1998年2月 『パロールの奪取』法政大学出版局 1998年にも一部収録 後に『解体』に所収)
- 「「多言語主義」の背景」(『月刊言語』27巻8号 特集「「多言語主義」のゆくえ」 1998年8月 大修館書店)
- 「フランスの一九世紀」(『江戸の思想』7号 特集「思想史の一九世紀」 ペリかん社 1997年11月)
- 「フランスを知り、フランスを越える—「フランス・イデオロギー」をめぐって」(田辺保編『フランス学を学ぶ人のために』世界思想社 1998年8月 後に「フランス・イデオロギーをめぐって」として最初の2頁を除き『解体』に所収)
- 「戦後五〇年を考える」(末川清・山口定・宮本憲一・坂野光俊編『戦後五〇年をどう見るか』下人文書院 1998年)
- 「現代における「翻訳」の問題」(『立命館言語文化研究』 特集 比較文化研究 10巻5・6合併号 1999年2月『解体』に所収 なおフランス語原文は“Problèmes actuels de la «traduction» –De quelle manière concevoir et rédiger de nos jours un dictionnaire français-japonais”として『立命館国際研究』11巻3号 1999年3月に加筆訂正のうえ所収)
- 「20世紀をいかに超えるか」(『立命館言語文化研究』創立10周年記念国際シンポジウム
 <二十一世紀的世界と多言語・多文化主義—周辺からの遠近法> 11巻1号 1999年6月
 なお英語版は“The 20th Century: How Do We Get Over It?”(translation James W.Hove)として同号に所収)
- “European Integration through Multicultural-Colored Glasses: Issues of Region and Immigration in

- the EU” (translated by James W.Hove; Miyajima Takashi, Kajita Takamichi and Yamada Mutsumi, eds. “Regionalism and Immigration in the Context of European Integration” JCAS Symposium Series 8, The Japan Center for Area Studies, National Museum of Ethnology, Osaka Japan 1999 日本語版は「多文化主義の観点からみたヨーロッパ統合—地域と移民の問題を中心に—」11巻1号 1998年6月に再録後『解体』に所収)
- 「マルクスは国民国家をどう見ていたか」(アエラムック『マルクスがわかる』1999年9月)
- 「戦後歴史学と国民国家論」(『歴史学研究』特別号 1999年10月)
- 「国民国家論の余白に」(『KEIO SFC REVIEW』№5 1999年10月 慶應義塾大学)
- 「多文化主義・多言語主義をアジアから問う」(『立命館言語文化研究』11巻4号 1999年12月)
- 「フランス革命とリン・ハント」(西川他訳『フランス革命と家族ロマンス』平凡社 1999年後に『解体』に一部省略して所収)
- 「国家論の現在と国民国家論の行方—「国民国家論」の立場から」(『神奈川大学評論』No34. 1999年11月)
- 「EUと文化摩擦—地域と移民の問題を中心に—」(『神戸大学国際文化学部主催第3回国際シンポジウム報告書』2000年)

エッセイ

- 「パリ・5月の記録—ソルボンヌの内庭より」(『展望』1968年8月 後に『解体』に所収)
- 「あるフランス青年の苦悩—アンリ・マルタンの手紙」(坂田昌一編『核時代と人間』雄渾社 1968年10月)
- 「ルイ・アルチュセールについて—フランスの思想状況にかんするレポート」(『立命館文学』304 1970年10月)
- 「五月の記憶—1968年フランス」(『人間と科学』№3 1970年11月)
- 「アンリ・ルフェーブルについて - フランスの思想状況にかんするレポート」(『立命館文学』310 1971年4月)
- 「現代文芸論を担当して」(『'71 学園通信』1971年 立命館大学)
- 「75 - 77, 滞仏雑感」(『日仏歴史学会会報』1978年3月)
- 「現代世界の思想家たち—ルフェーブル」(『東京大学新聞』1978年4月10日)
- 「フランスに滞在して - 老人たち, その人生と文明」(『'78 学園通信』立命館大学 1978年6月)
- 「左翼神話の崩壊とドリユ・ラ・ロッシェルの復権」(『京都大学新聞』1979年10月16日)
- 「フランス近代絵画の時代背景」(『視る』№150 1979年12月 京都国立近代美術館ニュース)

- 「桑原先生と戦後世代」(『桑原武夫集』月報 1980年12月18日)
- 「フランス人に日本語を教えて」(『海外広報文庫 フランス』1986年11月)
- 「国家とナショナリズムをめぐる3つの断章」(『歴史学研究』1987年7 - 9月(後に『射程』に所収))
- 「日記論」(『文学』vol 56 1989年6月)
- 「革命がナポレオンをつくった」(河野健二との対談『歴史読本』特別増刊 「フランス革命とナポレオン」1989年7月 新人物往来社)
- 「革命200年のパリ,そして日本」(『大学時報』vol.38-209 1989年10月 後に『解体』に所収)
- 「生島遼一先生追悼」(『海燕』1991年10月 福武書店)
- 「文化」という言葉の歴史 訳者覚え書(『立命館国際研究』4巻2号 1991年10月)
- 「帰航日程」(『17・18世紀大旅行記叢書月報』№9 岩波書店 1993年8月)
- 「『米欧回覧実記』と「観光」」(『京都新聞』1994年2月4日)
- 「『想像の共同体』[第二版の「序文」と新たに追加された2つの章]解題」(『立命館国際研究』7巻2号 1994年10月(105 ~ 108))
- 「私のゼミ自慢 国際関係学の脱構築と再構築を目指すゲリラ戦」(AERA Mook『国際関係学がわかる』朝日新聞社 1994年12月)
- 「書籍礼賛—スタンダール『赤と黒』」(『京都新聞』1994年12月3日夕刊)
- 「フランス革命とヨーロッパ統合 —あいさつに代えて—」(『立命館言語文化研究』特集 ヨーロッパ統合と文化・民族問題 6巻5・6合併号 1995年3月)
- 「文学のひろば」(『文学』1995春号 後「戦後50年と、ある非国民のつぶやき」に改題して『射程』に所収)
- 「思想の言葉」(『思想』1995年10月 後「一九九五年八月の幻影,あるいは「国民」という怪物について」に改題して『射程』に所収)
- 「ナポレオン - 近代を演じた名優」(『京都新聞』1995年7月27日)
- 「日本のミシュレ」(『色川大吉著作集』第2巻月報 1995年11月)
- 「国民国家を超えて インタビュー・松葉祥一」(『インパクション』№96 1996年3月)
- 「「暗殺の天使」または安達政勝のフェミニズムについて」(『マラーを殺した女—暗殺の天使 シャルロット・コンデ』解説 1996年 中央公論社)
- 「死せる革命とナポレオンの復讐」「フランスとボナパルティズム」(『歴史群像シリーズ』47 ナポレオン 1996年10月)
- 「不断に動く世界への感覚—E・H・カー『歴史とは何か』」(『図書』1997年4月 特集岩波新書を読む—創刊2000点—)
- 「フランス社会党の勝利と欧州連合の未来」(『読売新聞』1997年6月13日 後に『解体』に所収)

収)

「立命館大学国際言語文化研究所創設10周年をむかえて」(国際言語文化研究所『NEWS LETTER』No.1 1998年1月20日後に『立命館言語文化研究』11巻1号 1999年6月に再録)

「河野健二氏を悼む」(読売新聞夕刊 1996年8月14日)

「国境」(『AERA』朝日新聞社 1998年9月)

「資料 消えない言葉—パリ, 5月の記録」(ミシェル・ド・セルトー著 佐藤和生訳『パロールの奪取』法政大学出版局 1998年)

「対談 日本語教育の再構築 第9回「さまざまな文化の形」(田中望×西川長夫『月刊 日本語』1999年12月)

書 評

「ロベール・モージ著『18世紀における幸福の観念』」(『フランシア』№10 1967年)

「胸うつ—哲学者の覚悟・にこやかなスターリニズム批判—L・アルチュセール著(加藤晴久訳)『共産党のなかでこれ以上続いてはならないこと』」(『図書新聞』1979年8月11日)

「L・アドール(加藤節子・杉村和子訳)『黎明期のフェミニズム』—革命をくぐりたくましく生きるフランス女性群像」(朝日ジャーナル 1982年4月30日)

「「知識と秩序の結合」をモチーフとして —「合理化」と「国民の創出」を問題系に」(阪上孝『近代統治技術の誕生』岩波書店 1998年の書評『図書新聞』2444 1999年7月3日)

「的場昭弘・高草木光一編『1848年革命の射程』(御茶の水書房 1998)」(『神奈川大学評論』№32 1999年)

事 典 項 目

「フランス文化」(『日本大百科全書』第20巻 小学館 1984年 但し同百科全書CD-ROM版(1998)の再録にあたって後半部に加筆訂正 後に「フランス文化への疑い」として『解体』に所収)

「ナポレオン」(『歴史学事典』第3巻 平凡社 1995年)

「反動」(『歴史学事典』第4巻 平凡社 1996年)

「ボナパルティズム」(『歴史学事典』第四巻 平凡社 1996年)

「ボナパルティズム」(『マルクスカテゴリー事典』青木書店 1998年)

『日本小説を読む会会報』

(『日本小説を読む』上下 日本小説を読む会会報抄録 1996他参照)

「ロマネスク—「キューバ」を読んで」(9 1960年)

「深沢七郎『風流夢譚』—第27回報告レジュメ—」(14 1961年)
「大江健三郎『遅れてきた青年』—第37回報告レジュメ—」(24 1962年)
「日本小説と私」(37 1963年7月20日)
「大江健三郎『セヴンティーン』と『性的人間』—第53回報告レジュメ—」(40 1963年)
「道化論—ブルータスおまえもか—」(46 1964年)
「煙突男のはなし」(57 1965年)
「佐々木康之と共に過した4日間のアリバイのために」(63 1965年10月30日)
「『天の夕顔』を読んで」(64 1965年)
「大江健三郎『みづから我が涙をぬぐいたまう日』—第162回報告レジュメ—」(151 1973年)
「わが眠り」(155 1973年12月21日)
「病床にあったころ—『柿二つ』を読んで—」(221 1980年2月9日)
「中勘助『銀の匙』—第234回 報告レジュメ—」(232 1981年)
「織田作之助の『世相』と戦後—第286回報告レジュメ—」(276 1985年)
「小島信夫『抱擁家族』—第282回報告レジュメ—」(282 1985年)
「武田泰淳『ひかりごけ』(1954)—第314回報告レジュメ—」(304 1987年)
「おそろしい所」(399 1996年)

「『鹿鳴館』について」

- 1 「他者の視線」(69 1966・5・5)
- 2 「ピエール・ロチと永井荷風」(70 1966・6・21)
- 3 「芥川の『舞踏会』とロチの『江戸の舞踏会』」(71 1966・7・10)
- 4 「三島由紀夫の『鹿鳴館』」(72 1966・9・2)
- 5 「芥川と三島のあいだ」(73 1966・9・3)
- 6 「『鹿鳴館』と『戦後啓蒙主義』」(74 1966・11・15)
- 7 「舞踏会と女性解放」(75 1966・12・12)
- 8 「『藪の鶯』」(76 1967・1・10)

「わが田舎時代」

() もらい湯 (224 1980・5) () 転校 (225 1980・6) () 女生徒たち1 (226 1980・7)
() 女生徒たち2 (227 1980・8) () 産室の住人たち1 (229 1980・11・15) () 産室の
住人たち2 (230 1980・12) () 村の寺 (231 1981・1) () 遊び友達 (234 1981・4) ()
アルバイト1 (236 1981・6) () アルバイト2 (237 1981・7) () アルバイト3 (238
1981・9) () 塩田 (239 1981・10)

「モントリオール日記—1984 冬—」

(1)(276 1985・2)(2)(277 1985・3)(3)(279 1985・5)(4)(282 1985・9)(5)
(284 1985・11)(6)(285 1985・12)(7)(288 1986・3・1)(8)(292 1986・7)(9)(294
1986・10)(10)(297 1987・1・4)(11)(298 1987・2・6)

翻 訳

マドレーヌ・リフォー『解放戦線の20年』理論社 1965年(佐々木康之との共訳)

J.ブルセック「中国と西欧における歴史と叙事詩」(『ディオゲネス』2号 河出書房 1967年)(単訳)

スタンダール「ユダヤ人」「ファイリバール・レスカル」(『スタンダール全集』第5巻 人文書院 1968年)(単訳)

スタンダール『ナポレオンに関する覚え書』(『スタンダール全集』第11巻 人文書院 1970年)(単訳)

ルイ・アルチュセール『レーニンと哲学』人文書院 1970年(単訳)

ジャン・シエノー「東洋における平等主義とユートピアの伝統」(『ディオゲネス』5号 河出書房 1971年)(単訳)

ルイズ・ミッシェル『パリ・コムニオン』(上下)人文書院 1971年(天羽均との共訳)

ルイ・アルチュセール「イデオロギーと国家のイデオロギー装置」上下『思想』577・578 1972年7・8月(単訳)

スタンダール『ラシーヌとシェイクスピア』(第1部及び補論)『文学日記抄』(『スタンダール全集』第10巻 人文書院 1973年)(単訳)

ルイ・アルチュセール『政治と歴史—モンテスキュー・ルソー・ヘーゲルとマルクス』紀伊国屋書店 1974年(阪上孝との共訳)

モーリス・デュベルジェ『ヨーロッパの政治構造 - 人民なき民主主義』合同出版 1974年(天羽均との共訳)

ルイ・アルチュセール『歴史・階級・人間—ジョン・ルイスへの回答』福村出版 1974年(単訳)

ルイ・アルチュセール『国家とイデオロギー』福村出版 1975年(単訳)

アンリ・ルフェーブル『革命的ロマン主義』福村出版 1976年(小西嘉幸との共訳)

アンリ・ルフェーブル『構造主義を超えて』福村出版 1977年(中原新吾との共訳)

ルイ・アルチュセール『科学者のための哲学講義』福村出版 1977年(阪上孝との共訳)

ルイ・アルチュセール『自己批判』福村出版 1978年(単訳)

J=J.ルソー『演劇に関するダランペール氏への手紙』(『ルソー全集』第8巻 白水社 1979年)

(単訳)

J=J.ルソー『クリストフ・ド・ボーモンへの手紙』(『ルソー全集』第9巻 白水社 1982年)

(単訳)

J・ソレ『性愛の社会史』人文書院 1985年(奥村功・川久保輝興・湯浅康正との共訳)

J・ピントル『スタンダール スカラ座にて』音楽之友社 1993年(単訳)

ルイ・アルチュセール『マルクスのために』平凡社・平凡社ライブラリー 1994年6月(河野健二・田村俣との共訳)

フランソワ・フュレ/モナ・オズーフ編『フランス革命事典』みすず書房 1995年(河野健二・阪上孝・富永茂樹監訳)《ドニ・リシェ「クーデタ」, アラン・フォレスト「軍隊」(以上), ピエール・ノラ「国民」(以上)を担当》

リン・ハント『フランス革命と家族ロマンス』平凡社 1999年(平野千果子・天野知恵子との共訳)

(花森重行 作成)

西川長夫教授と国際関係学部の12年

国際関係学部を設置する方針が建てられて、1985年に「国際関係学部設置委員会」が作られたときに私も法学部から委員として参加し、当時文学部に所属していた西川先生の知遇を得ました。

私は若いときに西川先生の「ボナパルティズム論」の論文に接して、緻密な文献考証と歴史考察に驚いたとき以来、西川先生のお名前はよく知っていましたが、その印象があまりに強かったためにしばらくの間は先生が政治学者だと勘違いしたものでした。先生がフランスの政治学者のデュベルジェの本を翻訳されたことも私の誤解に輪をかけた原因でした。

それから10数年経って、学部設立という大学運営の局面で一緒にできることになりました。

西川先生は、設置委員会でおもに研究面の方針作成を担当され、生成期にあった（いままも発展途上ですが）国際関係学をこの学部から作り出していくための構想を出され、学部創設2年目の1989年には研究委員長として、基本路線を敷かれました。その後を引き継いだ私たちの世代が、たとえば学部紀要の「立命館国際研究」を先生の構想されたような内容に作り上げているかと問われると、内心、忸怩たるものがあります。

教育面では、「外国語にも強い国際関係学部」を目指そうということになり、専門科目を英語で受講できるだけの力をつけるために、他の大学で見られるようになってきていた「英語1言語教育」の可能性も検討されましたが、結局、英語に重点を置きつつも「英語と第二外国語（初修外国語）の2言語の習得」というカリキュラムが確定されました。このときも西川先生の発言が大きな方向付けになったと記憶しています。

1993年度から1994年度、および1997年度から1999年度の2回にわたって国際言語文化研究所長を引き受けられて、多くの研究者を結集して共同研究に取り組み、『「米欧回覧実記」を読む』など、日本の学界を揺るがす成果を公刊されてきました。西川所長のもとで、国際言語文化研究所が立命館大学

の中心的な研究センターとなっただけでなく、日本の文化研究に重要な地歩を築いたことをありがたくまた誇らしく思っております。

国際関係学部は西川先生の到達された地平を引き継いでいくという重い責務を負っています。しかし、それはきわめて遠い道のりでもあります。先生は、『フランスの解体？ - もうひとつの国民国家論』のあとがきで、「したがってフランスの解体というテーマは、多分に私自身の解体を意味することになるだろう」と書かれていますが、アメリカ研究者である私が、アメリカとの間でこのような学問的緊張感を果たして持ち得るだろうかと思ひつ、先生への感謝を申し述べる次第です。

2000年3月

立命館大学
国際関係学部長

安藤 次男

畏友西川長夫教授の御定年を祝って

我が畏敬する友西川長夫さんの定年の報を聞いて感無量である。西川さんと私はここ30年間文字どおり青春を共にしてきた。

最初に彼の名前を知ったのは大学紛争の頃であった。当時われわれは荒れる学園で体をはって頑張っていた。下手をすると急進派学生の言うとおり大学は解体してしまうのではないかと、そうしてはならじと、必死になっていた。そういった騒ぎのなかで当時かなり影響力のある総合雑誌「展望」にフランス留学中の仏文学者がカルチュラタンの学生反乱についてリポートを執筆した。そのリポートそのものは良質なものであったが、日本で苦勞しているわれわれにとって、そのリポートはあまりにも評論家的に見え、許しがたいものと写った。しかも、その執筆者が立命館の専任教員であることを知ってわれわれは文字どおり怒り心頭に発し、帰ってきたらただではすませないぞと息巻いた。その仏文学者こそが若き日の西川長夫であった。

その後どういう経緯があったかよくは記憶していないが、気が付いたらすっかり仲良くなっており、週に2、3度は5～6人の文学部の仲間と一緒にフランス料理の食べ歩きを楽しんでいた。立命館育ちの私にとって他大学から来た西川さん達は、新鮮であった。なかでも西川さんは特に優秀であった。じっくりと粘り強く、自分の頭で考えるタイプであった。恐らく京大の良い意味での伝統に連なる人であろう。

かれの出世作であるボナパルティズム論も、私の好きな『国境の越え方』（筑摩書房）も、文学専攻特有の徹底したテキストの読み込みの成果であった。その学問的方法論には啓発されること大であった。西川さんの業績についてここでふれる紙数は与えられてはいないが、スタンダリアンとして出発し、次第に文化や歴史の領域に踏み込んでいき、次々に大胆な問題提起と論争を繰り返し、文化と歴史、そして文学の3つの領域をまたぐ真の意味でのインターディシプリナリーなわが国を代表する研究者になった。

その間、親しい友人として絶えず様々議論してきたが、あれだけの大量の

執筆活動にもかかわらず、仕事を理由に付き合いを避けることは一度もなかった。心優しい友人であった。これだけの学者を立命館が正当に遇し得たか否か、心もとないところであるが、学生にとっても西川さんの存在が大きな刺激であったことは疑いのない事実である。願わくば立命館が西川さんの学問的成長にとって刺激的場所でありえたことを。そして今後もそうであり続けることを。長い間、有り難う。

2000年3月

立 命 館 大 学
総 長

長 田 豊 臣